要点 1 詩の種類・表現技法 【解答】

1 次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

A 海の風景　　堀口大学

空の石盤に
鷗がＡＢＣを書く　　第一連

海は灰色の牧場です
白波は緬羊の群れであろう　　第二連

船が散歩する
煙草を吸いながら　　第三連

船が散歩する
口笛を吹きながら　　第四連

B 寂しき春　　室生犀星

したたり止まぬ日のひかり
うつうつまはる水ぐるま
あをぞらに
越後の山も見ゆるぞ
さびしいぞ

一日もの言はず
野にいでてあゆめば
菜種のはなは
遠きかなたに波をつくりて
いまははや
しんにさびしいぞ

確認問題 【解答・解説】

(1) **A**・**B**の詩の種類としてあてはまるものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 文語定型詩　イ 文語自由詩　ウ 口語定型詩
エ 口語自由詩　オ 口語散文詩

A エ　**B** イ

(2) ――線部「空の石盤」は、隠喩によって「空」を「石盤」にたとえた表現です。この「空」と「石盤」のような関係になっている言葉の組み合わせを**A**の詩の中からあと二組探し、書き抜きなさい。

海 と 灰色の牧場 ・ 白波 と 緬羊の群れ

(3) **A**の詩で、擬人法が使われている連、倒置法が使われている連はどれですか。それぞれあるだけ探し、連の名まえを答えなさい。

擬人法 第一連・第三連・第四連
人でないものを人のように見立てる技法

倒置法 第三連・第四連
語順を通常と変える技法

(4) **A**の詩で、連どうしが対句になっているところがあります。どの連とどの連ですか。連の名まえを答えなさい。

同じ形にそろっている連どうしを探す。

第三連 と 第四連

(5) **B**の詩に使われている表現技法として適切なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 倒置法　イ 体言止め　ウ 直喩
エ 反復法　オ 擬人法

イ ・ エ

【解説】

要点1 詩の種類・表現技法

1 (1) A・Bの各詩について、用語と音数を調べてみる。

●**用語**

A……「書く」「……です」「散歩する」など　現代、普通に使われている言葉で書かれている。⇩口語詩

B……「見ゆる」「遠き」「つくりて」など　現代では日常使われない言葉で書かれている。⇩文語詩

＊「見ゆる」「遠き」「つくりて」は、現代ではそれぞれ「見える」「遠い」「つくって」と表す。

●**音数**

A……空の石盤に　(8)
鷗がABCを書く　(13)
海は灰色の牧場です　(14)
白波は緬羊の群れであろう　(16)
各行の音数がばらばら。⇩自由詩

B……したたり止まぬ(7)
日のひかり(5)
うつうつまはる(7)水ぐるま(5)
あをぞらに(5)
越後の山も(7)見ゆるぞ(4)
さびしいぞ(5)
一日(4)もの言はず(5)
野にいでて(5)あゆめば(4)
菜種のはなは(7)
遠きかなたに(7)
波をつくりて(7)
七五調を基調にしているが、全体的にこれといったきまりはない。⇩自由詩

ミスポイント　定型詩は、全行が同音でそろうか、あるいは「七五調」「五七調」など、数種の音がきちんとくり返されるものに対していうのが普通である。

参考
A・Bの詩の、内容から見た分類
内容のうえからは、Aは叙景詩、Bは「さびしいぞ」という作者の心情が中心なので叙情詩に分けられる。

(2) 隠喩(いんゆ)をとらえる問題。隠喩とは、「ようだ」や「みたいだ」などの語を使わないでたとえる方法。「たとえる」とは、あるものを、別のものに見立ててなぞらえること。この問いでは、詩の中から、何が何に見立てられているのかをとらえる。——線部をヒントにしてその関係を調べてみよう。

・空の石盤→「空」＝鷗がそこに字を書く「石盤」。——これと同様に〝＝(イコール)〟で結ぶことのできる関係にある言葉を探す。
・海は灰色の牧場です→海＝灰色の牧場
・白波は緬羊の群れであろう→白波＝緬羊の群れ

ハイレベル例題　Aの詩の第三連の「煙草」、第四連の「口笛」は、それぞれ何の隠喩か。考えて答えなさい。
(答)　煙草＝「煙」の隠喩　口笛＝「汽笛」の隠喩

(3) 「擬人法」とは、人でないものを人のように見立てて表現する比喩の一種。

Aの詩の擬人法
人でないもの
・鷗がABCを書く　(第一連)
・船が散歩する／煙草を吸いながら　(第三連)
・船が散歩する／口笛を吹きながら　(第四連)
普通は人の動作を表す表現

「倒置法」とは、通常と語順を変える表現技法。通常なら文末にくる述語が、主語や連用修飾語に先立つ形での倒置が多い。

Aの詩の倒置法
・船が散歩する／煙草を吸いながら　(第三連)
⬇普通の語順では…船が煙草を吸いながら散歩する
・船が散歩する／口笛を吹きながら　(第四連)
⬇普通の語順では…船が口笛を吹きながら散歩する

(4) 同じ形の表現を並べてあるのが対句。Aの詩では、第三連と第四連が「船が散歩する／……を……ながら」という同じ形になっている。

(5) Bの詩の表現技法をとらえる。

したたり止まぬ日の ひかり(体言)→体言止め
うつうつまはる 水ぐるま(体言)→体言止め
あをぞらに
越後の山も見ゆるぞ
さびしいぞ
一日もの言はず
野にいでてあゆめば
菜種のはなは
遠きかなたに波をつくりて
いまははや
しんにさびしいぞ
→比喩(隠喩)
⇩反復法

ミスポイント　「したたり止まぬ」「波をつくりて」は、〝人〟の動作を表す表現ではないのでオは不可である。

要点2 詩の情景・主題 【解答】

1 次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

虹の足　　吉野弘

1 雨があがって
2 雲間から
3 乾麺みたいに真っ直ぐな
4 [　　]がたくさん地上に刺さり
5 行く手に榛名山が見えたころ
6 山路を登るバスの中で見たのだ、虹の足を。
7 眼下にひろがる田圃の上に
8 虹がそっと足を下ろしたのを！
9 野面にすらりと足を置いて
10 虹のアーチが軽やかに
11 すっくと空に立ったのを！
12 ①その虹の足の底に
13 小さな村といくつかの家が
14 すっぽり抱かれて染められていたのだ。
15 それなのに
16 家から飛び出して虹の足にさわろうとする人影は見えない。
17 ――おーい、君の家が虹の中にあるぞオ
18 ②乗客たちは頬を火照らせ
19 野面に立った虹の足に見とれた。
20 多分、あれはバスの中の僕らには見えて
21 村の人々には見えないのだ。
22 そんなこともあるのだろう
23 他人には見えて
24 自分には見えない幸福の中で
25 格別驚きもせず
26 幸福に生きていることが――。

＝虹の足が現れた様子が具体的にえがかれている。

＝作者が考えたこと。

(1) この詩の中の[　]に入る言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 雨足　　イ 風
ウ 陽射し　　エ かげ

雨上がり、雲間から乾麺みたいに真っ直ぐに地上に刺すもの。

[ウ]

(2) ――線①「その虹の足」は、どのようにして現れたのですか。虹の足が現れた様子が具体的にえがき出されている部分を詩の中から五行でとらえ、初めと終わりの行の番号を答えなさい。

出現のさまを目のあたりにした興奮が「！」で表されている部分。

[7] 行目～[11] 行目

(3) ――線②「乗客たちは頬を火照らせ」とありますが、このときの乗客たちの心情として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大声を出したという恥ずかしさ。
イ 他人の幸福に対する反発と羨望。
ウ 人生の皮肉に対するいらだちと怒り。
エ 目の前の光景に対する感動と興奮。

頬を火照らせ→「見とれた」にかかることから考える。

[エ]

(4) この詩は、「作者が見たこと」とそれについて「作者が考えたこと」の二つの部分に分けられます。後半の初めの行を番号で答えなさい。

[20] 行目

(5) この詩で、「虹」の中にいながらそれに気づかない村の人々をえがくことで、作者はどんなことを言おうとしたのだと考えられますか。「ふだんの生活」という言葉も用いて説明しなさい。

例 他人には見えて自分には見えない幸福の中で格別驚きもせず幸福に生きていることは、ふだんの生活においてもたぶんあることなのだろう、ということ。

【解説】

要点② 詩の情景・主題

吉野弘（一九二六～　）は、山形県生まれ。酒田市の石油会社に約二十年勤務した後、コピーライターとなる。詩集に『消息』『幻・方法』『感傷旅行』など。

さりげない言葉で日常の風景をえがきつつ、その中に人生や社会の大切なことを表現する詩風には、独特の味わいがある。教科書や入試問題によく作品が採用される。「虹の足」は表現技法も多く（直喩・倒置法・擬人法など）問題作成には格好の素材なので特に注目を要する一篇といえる。

1 (1)　1～4行目の表現から、情景を思い浮かべる。「雨があがって」「雲間から」「地上に刺さ」ってくるものとしてふさわしいのはウしかない。

ミスポイント　アでは「雨があがって」という〝晴れ〟の情景に合わない。また、エでは「雲間から刺す」という表現と矛盾する。（「雲」の「間」から刺すのは「かげ」ではなく「光」的なものであるはず。）イでは「乾麺みたいに真っ直ぐな」という様子にそぐわない。

(2)　虹の足の出現の仕方がありありとえがかれている五行を探す。すると、虹の足の動作として、擬人法を用いて表現されている五行が見つかる。

(3)　この――線②は、次の行の「見とれた」にかかっている。「見とれた」は、心を奪われ、うっとりと見る様子を表す言葉だから、「感動や興奮」とあるエが正答となる。

ミスポイント　基本的な係り受けを忘れ、前後の内容の意味を深追いして考えすぎると別の選択肢を選んでしまう。詩は理屈ではないとはよく言われることだが、言葉としての基本的なことがらを無視して書かれているわけでもない。詩も言葉である以上、言葉のきまりはふまえられているのである。丹念に普通に読むことが結局は正しい解釈へとつながっていく。

(4)　実際に作者になったつもりで、「目で見たこと」を写生するように書いている部分と、そこから人生や幸福について述べている部分との境目はどこかを考えてみる。ヒントは「多分」という言葉。これは推量を表す。推量とは、「おしはかる」ことだから、この行以下が「作者が考えたこと」なのだという見当がつけられる。

入試では

(5)　主題をまとめる問題である。(4)で分けた後半の部分（作者の考えたことの部分）に着目する。「虹」が「幸福」の象徴であることをおさえ、作者が日常の中の幸福の在り方について考えたという詩の内容に沿って書く。

なお、本問はごく基礎的に主題を問うにとどめたが、入試ではそこからさらにふみこみ、主題を自分なりにどう受けとめたかを問う傾向もある。中一の段階ではやや難しいであろうが、次の例題にも挑戦してほしい。

ハイレベル例題　この詩にえがかれた「幸福」について感じたこと考えたことを百字以内で書きなさい。

（答）例 他人には見えて自分には見えない、そんな幸福の中に、今自分もいるのかもしれないと考えた。ふだんは幸福に気づかず、あたりまえと受けとめている家族の愛情や友人の存在に対し、感謝したい気持ちにもなった。（97字）

Q&A

Q：詩を味わうとは、どういうことですか。

A：詩の表現の見事さを理解し、その詩の根源にある作者の感動を共に味わうことだといってよいでしょう。そこに到達するための手がかりは、詩そのもの。作者が自分の心を表現するために磨き抜いた数行の言葉の列です。一つ一つの言葉を決しておろそかに思わず、えがかれている内容を順に自分の心の中に思い浮かべていくことが大切。そして伝わってくる感動を素直に受けとめ、作者の心に出会いましょう。

ですから、詩でも基本は語句の理解です。難しい語句はどんどん意味を調べましょう。作者自身の生涯や時代背景なども知っておいて損はありませんね。表現技法の学習にも励んでください。

コーヒー・タイム

紙風船　黒田三郎

落ちてきたら
今度は
もっと高く
もっともっと高く
何度でも
打ち上げよう
美しい
願いごとのように

吉野弘には『詩の楽しみ』（岩波ジュニア新書）という著書がある。入試問題に引用されたこともあるので読んでおきたい。上の詩はその本の結びの章に載っているもので、これも有名な作品。さりげない表現で〝希望〟の姿をうたい上げている。